毎日タイムズマシン

歴史が見えると、今が見える。

佐々木順一撮影

さあ、タイムズマシンに乗りこもう。
今日のテーマは？

家族・絆

東日本大震災の発生で、クローズアップされた「絆」の言葉。しかし、親子や夫婦など、深い愛情で結ばれた家族の絆は、いつの時代、どんな社会にあっても、断つことのできない最も強い結びつきとして、大切にされてきた。家族こそ、一人では決して生きていけない人間が最初に属する最小の社会だからだ。毎日新聞140年の紙面をみると、その最も大切な絆が揺らぎ、断たれる出来事が繰り返し起きていた。家族のあり方も大きく変わってきている。右上写真は東日本大震災から１カ月後の2011年４月11日、宮城県気仙沼市で地震発生時刻に黙とうする家族

1984・8 単身赴任

毎日新聞
無敵・山下 念願の金
ロス五輪 きょう閉幕
単身赴任 2割に迫る
パート雇用 大幅な伸び
ルイス 約束の4冠
勅使河原で米ソ接触
富山も金獲得

1984年８月13日

転勤者の２割に達する

労働省は12日、昭和58年の就職や離職状況を調べた雇用動向調査結果を発表した。①雇用全体の伸びは鈍化したが、パートタイマーは離職者が大幅に減る一方で、雇用の伸び率も前年の倍以上になった②企業内配置転換が増え40、50歳代を中心に単身赴任者が家族もち転勤者の約２割に達した――ことなどが主な内容。景気は回復基調にあるが、各企業とも手放しで楽観せず、正社員の採用よりパート増などで対応している実態を示している。

？もっと知りたい！

夫婦のいずれか片方が、家族を現在住んでいる土地に残したまま、一人で遠方に転勤する単身赴任は、日本的経営の大きな特色の一つである終身雇用と対の関係にある。高度経済成長期に制度として定着した終身雇用は、経営者にとって、優秀な労働力の安定的確保や勤労意欲の向上などのメリットがあるが、業績変動に合わせた雇用調整ができないため、企業内やグループ企業内で、引っ越しを伴う遠隔地への転勤・出向を頻繁に行う。このため、労働者は仕事を失わないために、家族の職業や教育を優先させて単身で赴任する。欧米では一部の幹部を除きこうした異動はない。

昭和57年4月、仕事帰りにデパートに立ち寄り夕食のおかずなどを買う＝新宿の小田急百貨店で

1981・3 中国残留孤児

中国から47人が来日
肉親探しの残留孤児
「娘では…」空港対面 むなし

1981年３月３日

来日し肉親探し始まる

終戦直後の混乱の中、旧満州（現中国東北部）で家族と生き別れになったまま中国人に育てられた日本人孤児47人が、厚生省の招きにより２日午後２時35分、成田着の中国民航機で〝故国〟の土を踏んだ。16日まで日本に滞在し、夢にまで見た肉親との再会を待つ。一行は昭和20年秋、新京市（長春市）順天広場近くで中国人夫婦に拾われた喩徳海さん(36)ら男子23人、女子24人で平均年齢は約40歳。

35年の歳月の厚い壁のなかで身元が判明したのは24人

？もっと知りたい！

1932年、旧満州に傀儡（かいらい）国家、満州国を建国した日本は、日本人の移住計画を進めた。中心となったのは農民で、全国で移民団を結成させ、満州に送り込み、その総数は45年までに32万人に上る。45年８月９日のソ連の参戦で、日本軍は敗走。敗戦時、旧満州には、軍人以外に150万人以上の日本人がいたとされるが、特に大陸奥地で置き去りにされた移民団などの民間人は避難民となって大陸をさまよい、多くの人が死亡した。その過程で身寄りの無くなった幼児は中国人の養子となり、女性は中国人の妻となって生き延びることになった。72年の日中国交正常化で、そうした残留孤児・残留婦人の実態が明らかになり、81年から、厚生省（現厚生労働省）が、彼らを日本に招いて肉親探しをする事業が始まった。

1977・6 出稼ぎ労働者悲劇

毎日新聞
11人のリスト公表
尹大佐が実行責任者
作業宿舎で11人焼死
山崩れ 12人生埋め

1977年６月24日夕刊

大阪で11人 火事の犠牲

24日未明、大阪市大正区の建設会社作業員宿舎から出火、激しい雨にもかかわらず密集した民家、商店、倉庫など９棟、約600平方㍍を全半焼。宿舎の１、２階に寝ていた建設作業員24人（うち女性２人）は狭い通路に先を争って逃げたが、男性11人が途中で煙にまかれて逃げ遅れ焼死体で見つかったほか６人が負傷する惨事になった。犠牲者は九州、中・四国方面から出稼ぎに来て建設現場を渡り歩く労働者ばかりで身元確認は難航。梅雨期で仕事が無く、前夜酒を飲んで熟睡したため逃げ遅れたのと、木造の粗末な建物で火の回りが早かったのに出入り口が１カ所しか無かったため、多数の犠牲者を出したらしい。

？もっと知りたい！

一定期間、家を離れてよその土地で働く出稼ぎは、戦後の高度経済成長期から1970年代に目立つようになった。主に東北や北陸、信越地方の寒冷地の農民が冬季の農閑期に都市部の建設現場などで働く例が多く、労働者不足に悩む都市部の貴重な労働力供給源となった。現在は、日系ブラジル人やペルー人など開発途上国からの出稼ぎ労働者が増え、就労ビザを持たない外国人の不法就労も社会問題化している。

米作だけでは食べていけないと、農閑期の冬場、東京での土木作業などに上京した農民たち＝1965年12月

1968・11 東大紛争

東大に〝母心〟乗込む
短歌掲げ キャラメル配り
暴力捨てぬ君ら悲しき
教育大の形勢逆転
移転推進派敗れる

1968年11月21日夕刊

母乗り込み短歌で思い

立て看板が林立した東大構内。駒場祭のポスター「とめてくれるな　おっかさん　背中のいちょうが泣いている　男東大どこへゆく」の隣に母親たちの思いを短歌で訴える看板が並んだ

21日正午過ぎ、約20人のママたちが段ボール箱を抱えて東大構内に現れた。安田講堂前に行って、正面についたてを持ち出し、和紙に達筆でしたためた短歌を張り出した。「主義思想をつらぬかむため角棒をふるうというか自己をみつめよ」「六甲の嶺清らかに平和なり吾子は都にいかにすごすや」「暴徒とも反逆ともいわるる青年の涼しきひとみにわれはとまどう」「いちょう散る静けき大学構内に暴力を捨てぬ君ら悲しき」「衝突を避けるすべなきいらだちを母らは泣きて君らを想う」「衝突のとき刻々と迫り来ぬ母らは中に入りて避けたし」

この短歌を張り出すと、すぐさま段ボール箱を開けた。中には10円箱のキャラメルがぎっしり。１個ずつ学生たちに配り始めた。「とにかく学生たちの間には、不信と憎しみだけがあるのでしょう。愛を取り戻して……」と、キャラメルを手渡すのだが、どうもしっくりいかず、渡す方も受け取る方も照れくさそう。

？もっと知りたい！

1960年代末、全国で続発した大学紛争。その頂点が68年からの東大紛争だった。機動隊の学内導入に反発した学生たちが10月、全学無期限ストに突入した。翌年１月には学生が占拠する安田講堂を機動隊が突入して封鎖を解除、多数の学生を逮捕した。これで紛争は収拾したが、東大は69年度の入試の中止に追い込まれた。

N検 NEWS 時事能力検定
ニュース検定公式サイト
www.newskentei.jp
検定にチャレンジ！

２級　配偶者や子ども、親、友人など大切な人を亡くし、大きな悲嘆に襲われている人に対するサポートのことを何というか。正しいものを次から一つ選べ。

①グリーフケア②スキンケア
③デイケア　④メディケア

1962・9 核家族

千里ニュータウン 入居始まる

はや引越し組も
千里ニュータウン 第1次入居始まる

1962年９月15日夕刊

総工費1000億円を投じて大阪府が建設中の〝千里ニュータウン〟は15日、東南すみC地区（吹田市佐竹台）に第１次入居者を迎えてスタートした。赤い土のなかにそそり立つアパート群を縫って午前９時半から入居者がぞくぞくと訪れ、現場監督員詰め所に特設された吹田市の入居手続き受付所で登録転入学などの手続きを取った。早くも引っ越し道具を運び込んだところも20戸ほどあった。千里ニュータウンは豊中、吹田両市にまたがる1155万平方㍍の土地に昭和41年度完成を目指して３万戸、人口15万の町を建設しようというもので、32年に企画してから５年ぶりの誕生。

？もっと知りたい！

戦後の高度経済成長期、人口が都市部に大量移動し、夫婦またはその未婚の子女だけで構成される核家族の割合が急増した。東京、大阪などの大都市圏では、人口増に対応するため1950年代から郊外に新しい市街地＝ニュータウンの造成を計画、実施した。千里ニュータウンは日本初の大規模ニュータウンとして開発され、今年、初入居から50年の節目の年を迎えた。

竹ヤブと松林と雑木の山だった千里の丘陵に、将棋倒しの将棋のコマのように大小さまざまの長方形の団地住宅がならんで、千里ニュータウンができた＝1970年３月、本社ヘリから撮影

1949・6 引き揚げ

岸壁の母 涙の歓迎アーチ

引揚船高砂丸帰る
毎日新聞
労苦ふっ飛ぶ笑顔
お、やっぱり故国だ
金詰り克服に乗出す
所得税除引上げ

1949年６月28日

シベリア引揚第一船高砂丸は国民挙（こぞ）って待ち受ける懐かしの故国へ――27日午前９時舞鶴東港ミヨ岬に投錨（とうびょう）、引き揚げた2000人の上陸は無事完了した。純白の高砂丸は、27日未明、京都府最北端の経ケ崎灯台の光に迎えられ、紫色にけぶる越前岬を左に眼前にぽっかり浮かぶみどりの冠島を過ぎればもう舞鶴港だ。この日舞鶴は梅雨空のどんよりとした天候であるが、山々はあくまで青く天然の歓迎アーチで出迎えている。〝帰ったぞ、帰ったぞ〟子供のようにはしゃぐ者、うれし涙をぬぐいもせず甲板に立ちつくしあかずながめる故国の山々にも「ああいいな、やっぱり故国だ」とながめる姿が痛いほどわれわれの胸に映るのだ。

舞鶴で中国からの引き揚げ者を、涙で迎える家族たち

？もっと知りたい！

1945年の敗戦時、海外には約660万人の日本人がいた。日本への引き揚げは、民族大移動ともいえる大規模なもので、ソ連によって不法に抑留された人の引き揚げは特に遅れ、最初の引揚船が京都府の舞鶴港に入港したのは49年だった。舞鶴は中国大陸や朝鮮半島からの引き揚げ者の主な上陸港となり、厚生省（現厚生労働省）は舞鶴地方引揚援護局を設置し、同援護局が閉局される58年までの13年間に66万4531人の引き揚げ者と１万6269柱の遺骨を受け入れた。引揚船入港のニュースは新聞やラジオで事前に報道され、入港のたびに、親族の帰国を待ちわびる家族が全国から集まった。帰らぬ息子の生存を信じ、入港のたびに岸壁で待つ母親をモデルにした歌謡曲「岸壁の母」も54年に作られ、大ヒットした。

1944・8 学童疎開

元気よく父母に「さよなら、さよなら」

在一部の重要に国泉の線
素早く防空服に
万歳で歓迎

1944年８月５日

４日、疎開の子供第１陣が上野駅と品川駅から元気でたって行った。楽しいわが家、懐かしい母校、住みなれた帝都を後に、子らの顔には何の屈託も不安もなく希望に生き生きしていた。都下瑞穂町へ行く品川区城南第二国民学校の児童159人はしばらくのお別れになる校庭に集合。残留の児童や見送りの父兄に囲まれながら校長先生の訓示を受けた。つり竿をもった子、軍艦の模型をかかえた子、ポケットにお手玉をのぞかせている子……もう心は疎開地へ飛んでいる。９時には朝夕慣れた校門を出発した。父や母の大半も駅まで行かずにここでさようなら。見返りもせずに飛び立つような様子で遠くなって行く子供たちの背負い袋を見送った。

同じ４日の０時50分には、上野駅発直江津行きの列車につながれた疎開学童専用車３両で上板橋第三国民学校170人、練馬、同第二、石神井東、同西、大泉第二の５校28人、計198人の子供たちが疎開先の妙義山麓へたって行った。みんな背負い袋には２食分のお弁当と10日分の非常米を持っている用心深さ。木剣をかつぎ、雨傘を抱えてどの子も明るい顔だった。「さよなら、さよなら」と叫ぶどの顔も、お父さんやお母さんの気遣いを吹き飛ばすほどに元気よく、いかにも強そうだった。子供らは行った――子供らのいなくなった寂しい夕闇が家庭を訪れようとしたその頃、突如警戒警報が発令された。「ああよかった」。可愛い子らを安全な場所へやった親たちは心配もなくただちに防空活動の準備に入ったことだった。

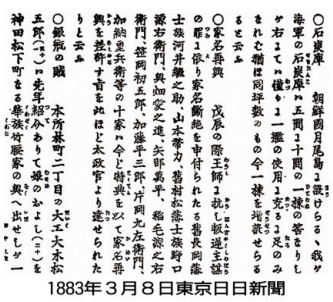
？もっと知りたい！

太平洋戦争末期、米軍の空襲による若年人口の喪失を恐れた政府は、東京、大阪など大都市圏の国民学校（小学校）３年生以上の児童を地方都市や農村に移住させることを決めた。学校ごとの集団疎開と、親戚などを頼る縁故疎開があり、東京の集団疎開は1944年８月４日に始まった。翌５日の記事は、子供たちが遠足にでも行くかのように心躍らせている様子を描いているが、疎開先では、いじめや栄養失調などで悲惨な体験をする例も少なくなかった。

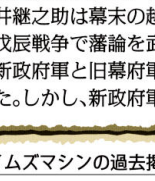
みんなで入浴する学童疎開の子供たち

1883・3 家制度

河井継之助ら十家 家名再興 許される


○石炭庫
○家名再興
○銀瓶の賜

1883年３月８日東京日日新聞



河井継之助（長岡市立中央図書館提供）

戊辰の際王師に抗し（戊辰戦争で官軍に抵抗し）、反逆首謀の罪により家名断絶を申し付けられたる、旧長岡藩士族河井継之助、山本帯刀、旧村松藩士族野口源右衛門、奥畑愛之進、矢部万平、稲毛源之右衛門、笹岡初五郎、加藤平三郎、片岡九左衛門、加納重兵衛等らの十家は、今度特典をもって家名再興を差し許す旨を、このほど太政官より達せられたりという。

河井継之助は幕末の越後長岡藩の重臣。戊辰戦争で藩論を武装中立にまとめ、新政府軍と旧幕府軍との調停を構想した。しかし、新政府軍に拒絶されたため、長岡藩は奥羽越列藩同盟に加わり新政府軍と戦い、河井も戦死。記事は「朝敵」「賊軍」の指導者として、新政府から家名断絶の処分を受けた河井家の再興が許されたことを報じている。

？もっと知りたい！

「家名」の基になる「家」は、江戸時代に発達した武士階級の家父長的な家族制度で、1898年に制定された民法で法律として規定された。家族を戸主によって統率された家に属させ、家族の婚姻・養子縁組には戸主の同意が必要とするなど、戸主に大きな統率権限を与えていた。戦後、日本国憲法の制定にあわせて民法も大幅改正され、家制度は廃止された。

次回のテーマは〝センバツ〟

毎日タイムズマシンの過去掲載分はhttp://mainichi.jp/sp/140times/でご覧になれます

正解① 「グリーフ」は「悲嘆」を意味する英語。配偶者、親、友人などを亡くすと、喪失感や自責の念、怒りやうつ状態など精神的、身体的な症状が表れる。そうした人に対する第三者によるサポート。

140 毎日新聞創刊140年

充電式電池には地球の稀少な資源がいっぱい！使い終わったら回収にご協力を！

身の回りの電気製品に使用される充電式電池には、地球の稀少な金属資源が使われています。リサイクルにより取り出された資源は、ニカド電池、ステンレス製品、磁石などに再利用され、ふたたび私たちの暮らしの中にもどってきます。JBRCは、資源有効利用促進法に基づき、電池メーカーや使用機器メーカー、輸入事業者などが共同で小形充電式電池の無償回収、再資源化に取り組んでいます。

誰でも気軽にできる！小形充電式電池のリサイクル！

黄色いリサイクルボックスは電気店、スーパーなど全国のリサイクル協力店に設置しています！

詳しい情報とお近くの協力店はホームページで！
http://www.jbrc.com

産業廃棄物広域認定第39号取得
小形充電式電池リサイクル
一般社団法人 JBRC
〒105-0011 東京都港区芝公園3-5-8 機械振興会館
TEL 03-6403-5673 FAX 03-6403-5683
回収は会員の充電池が対象です。会員企業はJBRCホームページで確認ください。